

世界遺産アカデミー認定講師 File No.14

このコーナーでは、世界遺産アカデミーの啓蒙活動にご支援いただいている世界遺産アカデミー認定講師の方に毎回スポットを当て、お話を伺います。第14回は、認定講師としてご活躍されるだけでなく、「ベルギービール・プロフェッショナルマスター」や「自然観察指導員」の資格も取得され、食や陶芸、登山、ガーデニングといった多彩な趣味をお持ちの世界遺産アカデミー正会員の萩原卓（はぎはら・たかし）さんです。

——きっかけは、魅了された西欧文化

世界遺産との最初の出会いは30年ほど前、リビアのトリポリに1年ほど駐在勤務していた時でした。現地に滞在しながら、出張者の出迎えや宿泊施設管理、滞在ヴィザ申請など総務全般を担っていました。お酒も飲めず娯楽も少ない現地で、地元のドライバーに案内してもらったところが、古代ローマ帝国時代に築かれた『レプティス・マグナの考古遺跡』でした。規模の大きさに圧倒され、野外劇場から美しい地中海の景観を眺めていた記憶があります。

世界遺産に本格的に興味を持ち始めたのは、海外出張で何回かベルギーを訪れるようになった2003年頃からです。『ブリュッセルのグランプラス』に並び建つ市庁舎やギルドハウスは特徴のある石造りの建築ですし、大聖堂のステンドグラスから射し込む光は神秘的で、石畳の続く旧市街の舗道は歩くだけで快い空間と浪漫を

感じさせます。

西欧に魅了され世界遺産への関心も高まっていた頃、「第1回世界遺産検定」の電車内広告を見かけました。「よし少し学んでみよう」といざテキストを開いてみると、たったひとつの世界遺産を理解するだけでも多岐に亘る知識が必要だと気づかされ、興味の対象が広がりました。たとえば、文化遺産からは、歴史や宗教、文化慣習はもちろん、その地で生きてきた人々の姿が鮮やかに見えてきますし、自然遺産では、地球がどのような変遷を迎えて生成されてきたのかを知った上で、今ある自然美を見ると、また違った捉え方ができます。絶滅危惧種は、人間活動が引き起こした結果か自然淘汰なのかも興味深いです。「世界遺産は、何と奥深く、いろいろな魅力が詰まっているのだろう」と思いました。色々な分野の中で、最近、私が興味を寄せているのが、文様です。キリスト教文化に見られる葡萄や樹木、動物の文様、



ヴェネツィア旅行での1枚。「イグアス国立公園」、「アルプラとベルニナの景観とレーティッシュ鉄道」と今後訪れたい世界遺産にはキリがありません(笑)、と萩原さん

イスラム教文化では幾何学的なアラベスク模様、仏教圏では蓮華や蔓などが精緻に刻まれています。細かなレリーフや彫刻などの装飾が施された壁も多く、モティーフにも独自性、象徴性があり多彩です。興味のある世界遺産関係のテレ

ビ番組はDVDに保存しているのですが、表面のラベルには気に入った文様を背景にしてダイレクトプリントしています。かつて放送されていたNHK番組「探検ロマン世界遺産」は、ユーミンのテーマ曲も含めて好きな番組でした。「BBC地球伝説」や「THE世界遺産」、「ワイルドライフ」などはよく観ています。また、美術館の企画展や展覧会にもたびたび足を運ぶようになりました。2012年に訪れた「インカ帝国展」は、ヴァーチャル映像も楽しめ、いつか訪れたい「マチュ・ピチュ」への憧れも相まって、印象深いものでした。

——懸念の尽きない世界遺産の課題

誰にとっても特別な世界遺産があるように、想い入れの強い世界遺産は、やはりベルギーやオランダの世界遺産です。『ブリュッセルのグランプラス』だけでなく、『アムステルダム中心部-17世紀の

環状運河地区』や『プルージュの歴史地区』なども、思い出深いところ。イタリア、フランス、スペインなどは見所ある世界遺産を効率的に周遊できるので、お勧めです。『モン・サン・ミッシェルとその湾』は中世の多様な建築様式が見られますし、『ヴェネツィアとその潟』や『コルドバの歴史地区』も、それぞれ独自の魅力に溢れています。少し離れて、トルコの『イスタンブールの歴史地区』は東西文化の交流が複雑に入り混じっていて特徴的です。

現在、注目している世界遺産は『富士山-信仰の対象と芸術の源泉』です。私も山が好きですが、富士山は一度に多くの登山者が入山できる山ではありませんので、事故や弾丸登山、観光地化による弊害が懸念されますし、遺産価値の保全措置は不可欠です。他にも、シリア内戦やタイの政情不安は人々の命を奪い、価値ある遺産も次々に破壊されているので、憂慮しています。これらも含めて、世界遺産の課題は山積みです。どんなに

強固な建造物でも自然災害や環境破壊、過度の観光開発から守ることが必要です。紛争で深刻な事態に陥っている国、経済優先の政策を採る国もあります。ヴェネツィアやオランダ干拓地などは気候変動の影響で水没を免れないと言われています。一方、世界遺産基金は決して潤沢なわけではなく、どの国も財政難の現状に直面しています。保全・修復の考え方については、『ヴェネツィア憲章』の解釈も気になるところです。「真正性」にこだわり過ぎると、最新技術を要する修復は不可能となってしまいますので、今後も柔軟な運用を望みます。

遺産価値や登録範囲を判断する難しさ、増え続ける世界遺産を今後どう管理するか、国や地域の不均衡、推薦の積極性にも国ごとに温度差があります。世界遺産を未来に継承させていくために、次のステージに私たちは進まなければいけません。世界遺産アカデミー認定講師として、「人類共通の宝物」の遺産価値を若い世代に積極的に伝えていきたいと思っています。